

# マクラウドの古典派批判

——エコノミックスの誕生とマクラウド——

土井 日出 夫

## はじめに

マクラウドは、これまでもっぱら、銀行論、信用論の専門家としてのみ知られてきたといってよい<sup>1)</sup>。近年、それとのかかわりで、マクラウドが、いわゆる「内生的貨幣供給論」の「草分け的存在」として注目されていることは、特筆に値する<sup>2)</sup>。

しかし、そのマクラウドが「限界革命の先駆者」<sup>3)</sup>として、古典派経済学のポリティカル・エコノミーから、新古典派経済学のエコノミックスへの移行を先導したことはほとんど知られていない。本稿は、マクラウドが、「エコノミックスへの移行」を先導した側面に焦点をあてるとともに、合わせて、マクラウドの経済学の全体像を明らかにすることを課題とする。そのことがひいては、現代の「内生的貨幣供給論」の評価に、新たな視点を加えることになるからである。

## I マクラウドの生涯

マクラウドの経済学そのものを扱うまえに、マクラウドの生涯を簡単にみておこう。

ヘンリー・ダンニング・マクラウドは、1821年に、スコットランドの地主の息子としてエディンバラに生まれた<sup>4)</sup>。彼の父親は、地主でありながら、卓越した自由貿易主義の議員であった<sup>5)</sup>。ヘンリーは、ケンブリッジ大学のトリニティーカレッジを1843年に卒業した後、1849年に弁護士となった。1854年には、王立

英国銀行 (the Royal British Bank) に取締役として参加し、1845年の株式銀行法のもとでの銀行の法的地位について、覚書と意見を執筆した。マクラウドはこのときの経験をもとに、翌1855年、『銀行業務の理論と実際』<sup>6)</sup>を刊行する。ハイエクによれば、「この著作によるイングランド銀行の政策の歴史的発展についての説明は、この問題の研究にとって、長い間唯一の簡便な情報源であったし、今日でさえ完全には乗り越えられていない。」<sup>7)</sup>。マクラウドはしかし、この著作において、イングランド銀行の政策のみを扱ったのではなかった。彼は同時に、経済科学一般の再構築に取り掛かったのである。それは、「商業の実際の原理とメカニズムを述べるためには、スミスやリカード、ミルらは全く役に立たなかった。」<sup>8)</sup>からである。経済科学を再建するというマクラウドの計画は、引き続き1858年の『政治経済学の基礎』<sup>9)</sup>の刊行となって現れた。後にマーシャルは、マクラウドのこれらの議論について、形式的にも内容的にも、ワルラスとメンガーによる古典派価値論への批判を先取りしている、と評価している<sup>10)</sup>。この点については後ほど詳しく検討するが、重要なことは、古典派のポリティカル・エコノミーから、新古典派のエコノミックスへの転換過程において、マクラウドが少なからぬ影響を与えたという事実である。

このように、マクラウドの前半生は、順風満帆そのものといっても過言ではなかった。しかし後半生は、打って変って厳しい逆風にさらされるこ

ととなる。逆風の第一として、彼の主宰する銀行が破産したことに関連し、詐欺の共謀罪に問われ、有罪となったことがあげられる<sup>11)</sup>。このことが、マクラウドの銀行家としての活動のみならず、彼の、銀行論、金融論の研究者としての評価にとってもマイナスとなったことは想像にかたくない。また、彼の『政治経済学の基礎』を、ナポレオン三世の政府が、積極的に普及させようとしたことも、結果的に逆風の原因となった<sup>12)</sup>。イギリスの読書人の反感を買ったばかりでなく、ナポレオン三世の失脚とともに、フランスの読書界からも冷遇されるようになったからである。さらに、マクラウドの議論が、細目においては、初学者もあきれるほどの誤りを犯していたことも、学者としての経歴に大きな影を落とした<sup>13)</sup>。彼自身が望み、何度も試みたにもかかわらず、生涯、大学の正規のポストにつけなかったことも、そのことが障害となった可能性は大きい。

とはいえ、マクラウドの執筆活動に向けるエネルギーは衰えることがなかった。その後、『経済哲学の原理』1872年<sup>14)</sup>、『信用の理論』1889年<sup>15)</sup>、『経済学の歴史』1896年<sup>16)</sup>など、それぞれ独自の価値を有する著作を発表し続け、20世紀のはじめ、1902年に没した。長寿であった。

## II 同時代人マルクスのマクラウドへの注目

マクラウドはやや若いとはいえ、マルクスとほぼ同時代を生きている。また、労働価値説を肯定したマルクスとは逆方向からではあるが、ともに古典派経済学の批判に従事した。にもかかわらず、マクラウドにとっては、経済学者としてのマルクスはまったく視野の外にあったといつてよい。『資本論』の英訳の刊行が遅れた(1886年)ことも理由の一つではあるが、仮にそれを読んだとしても、マクラウドの資質は、マルクスの労働価値説を受け付けなかったであろう。

しかし、逆にマルクスは、マクラウドをかなり意識していたといつてよい。以下、5箇所から引用する。

①『経済学批判』第一章 A「商品の分析の史的考察」のなかの「リカードは古典派経済学の完成者として、労働時間による交換価値の規定を最も純粋に定式化し展開したのであるから、経済学の側から起こされた論争は、当然彼に集中された。この論争から大部分ばかげている形態を取り去ると、それは次の諸点に要約される。」の「大部分ばかげている形態」に関する注として、

「おそらく最もばかげたものは、コンスタンシオによるリカードのフランス語訳にJ. B. セーがつけた注釈であり、最も学者ぶって尊大なものは、マクラウド氏の最近刊行された『為替の理論』、ロンドン、1858年、であろう。」<sup>17)</sup>

②『経済学批判』第二章「貨幣または単純流通 3 貨幣」のなかの「イギリスでは、鑄貨としての貨幣は、ほとんどもっぱら生産者と消費者とのあいだの小売取引や小口取引の部に封じこめられているのに、支払手段としての貨幣は、大口の商取引の部を支配している。」の注として、

「マクラウド氏は、その空論的な定義自慢にもかかわらず、最も基本的な経済諸関係をさえいどく誤解しているので、彼は貨幣一般をその最も発展した形態である支払手段の形態から発生させているほどである。とりわけ彼は次のようにいっている。人々は彼ら相互のサービスを必ずしも同時に必要とするものではなく、また同じ価値量のサービスを必要とするものでもないから、「第一の者から第二の者に支払われるサービスの一定の差または額が残るであろう。——これが債務である。」この債務の所有者は、彼のサービスを直接には必要としない他の者のサービスを必要とする。そこで「第一の者が彼に対して負っている債務をこの第三者に移譲する。こうして債務証書はその持ち手を変える——これが通貨である。…ある人が金属貨幣で表現された債務証書を受け取れば、彼は債務者のサービスだけではなく、勤労社会全体の

サービスをも支配することができる。」マクラウド『銀行業の理論と実際』、ロンドン、1855年、第一巻、第一章<sup>18)</sup>

③『資本論』第一巻、第一章、第三節 A「簡単な、個別的な、または偶然的な価値形態」の4「簡単な価値形態の全体」のなかで、「われわれの分析が証明したように、商品の価値形態または価値表現が商品価値の本性から生じるのであり、逆に、価値および価値の大きさが交換価値としてのそれらの表現様式から生じるのではない。ところが、この逆の考え方が、重商主義者たち、およびその近代的な蒸し返し屋であるフェリエ、ガニルなどの妄想であるとともに、彼らとは正反対の論者である近代自由貿易外交員、たとえばバスティアとその一派の妄想でもある。重商主義者たちは、価値表現の質的な側面に、それゆえ貨幣をその完成形態とする等価形態に重きを置き、これに対して、自分の商品をどんな価格でもたたき売らなければならない近代自由貿易行商人たちは、相対的価値形態の量的側面に重きを置く。その結果、彼らにとっては、商品の価値も価値の大きさも交換関係による表現のうち以外には実存せず、したがって、ただ日々の物価表のうちのみ実存する。スコットランド人マクラウドは、ロンドンバード街の混乱をきわめた諸表象をできる限り飾り立てるといふ彼の職能において、迷信的な重商主義者たちと啓蒙された自由貿易商人たちとのみごとな総合をなしている。」<sup>19)</sup>

④『資本論』第一巻、第四章「貨幣の資本への転化」第一節「資本の一般的定式」のなかの「自己を増殖しつつある価値がその生活の循環のなかでかわるがわるとする特殊な現象形態を固定させてみれば、そこで得られるのは、資本は貨幣である、資本は商品である、という説明である。」の注として、「生産的目的のために用いられる通貨 (!) は資本である。」(マクラウド『銀行業の理論と実

際』、ロンドン、1855年、第一巻、第一章、55ページ)<sup>20)</sup>

⑤『資本論』第二巻、第十一章「固定資本と流動資本とに関する諸学説 リカードウ」の最後で、「万事をいよいよのない偏狭な銀行家的立場から考察するマクラウド、パッターソンなどのような最近のイギリスの、とりわけスコットランドの経済学者たちの場合には、固定資本と流動資本との区別が、“要求払預金”と“通知払預金”(通知なしに引き出しうる預金とまえて通知してはじめて引き出しうる預金)との区別に転化されている。」<sup>21)</sup>

以上、マルクスが、マクラウドに言及した部分を5つ引用したが、まず気付くことは、『経済学批判』と『資本論』とで、マルクスのマクラウドに対する評価に若干変化がみられることである。『経済学批判』においては、「最も学者ぶって尊大」—①であるとか、「最も基本的な経済諸関係をさえひどく誤解している」—②といった、最大級の否定的評価が与えられているが、『資本論』においては、「重商主義と自由貿易主義とのみごとな総合 (gelungene Synthese) をなしている」—③、と、否定的ななかにも「みるべきもの」を見出しているからである。このことは、マルクスのマクラウド評価が、『経済学批判』執筆の時期から『資本論』執筆の時期までに、より内在的なものに変化したことを意味すると思われる。

とはいえ、「重商主義と自由貿易主義のみごとな総合」とは何を意味するのであろうか。結論からいえば、『資本論』の「価値形態論」における文章からは、その真意はつかめない、というほかない。ただし、文字通り、貿易政策としての「重商主義と自由貿易主義との総合」という意味であれば、推測は成り立つ。この点は後述する<sup>22)</sup>。

いずれにせよ、マクラウドの「価値論」につ

いては、マルクスは、全体として否定的ではありつつも、ある種の「みるべきもの」を見出していた（もしくは見出しつつあった）といえよう。では、マクラウドの「資本理論」に対するマルクスの評価はどうであろうか。

実は、この点では、マルクスのマクラウド評価は「不当な一面化」である可能性が高いのである。④でマルクスは、マクラウドが「通貨は資本である」と述べていることを根拠に、マクラウドを、「資本は貨幣である」と主張した論者として扱っている。しかし、「貨幣は資本である」という命題と、「資本は貨幣である」という命題は別である。たしかにマクラウドは前者の主張を行っているが、後者の主張は行っていない。その意味で、不当な一面化であるといっても過言ではない。この点も後に詳しく述べたい<sup>23)</sup>。

また⑤では、マクラウドが、固定資本と流動資本の区別を、預金の引き出し方の区別で説明したかのように述べられているが、これは明らかな誤解である。後述するように、この固定資本と流動資本の区別ほど、マルクスの理論とマクラウドの理論が接近した論点はないといえる<sup>24)</sup>。この、固定資本と流動資本をめぐる問題が、信用理論にとって有する意義を考えると、マクラウドに対するマルクスの誤解は看過しえない重みをもっていると思われる。以下、まずマクラウドの価値論、および資本理論の特徴を述べ、合わせてその方法論を概観することとする。なお、マクラウドの基本的主張は、初期の『銀行業務の理論と実際』、『政治経済学の基礎』及び『経済哲学の原理』でほぼ出尽くしているといつてよいので、以下の説明は、その3著に依拠していることをあらかじめお断りしておく。

### Ⅲ マクラウドの価値論

マクラウドの価値論の特徴は、「富概念の無体財産への拡張」を前提していることである。その意味で、マクラウドの議論は、富を「土地

と労働の年々の生産物<sup>25)</sup>とした、アダム・スミスへの直接的な批判となっている。まずこの点からみよう。

#### (1) 「富」概念の「無体財産」への拡張

「あらゆる文明社会には、売買はされるが現在のところ存在しておらず、にもかかわらず交換の対象になるような、膨大な価値の財産が存在する。そしてこのことは、延期された支払いの現在価値の理論をすべて含んでいる。この包括的な表題のもとには、土地財産、年金、公債の価値の理論と、政治経済学者にとっての大きな躰きの石である信用の学説のすべてが含まれている。この単一の標題のもとに、政治経済学者には完全に無視されているところの、しかしながら他のすべての財産を合わせたよりもはるかに膨大な価値の財産が含まれているのである。将来の支払いは、売買されうる。そしてそれは、最終的に支払われる貨幣とは全く異なる現在価値を有し、1クオーターの小麦と全く同じように商業上の商品なのである。イギリスにおいて商業上の商品であるところの、延期された支払いの現在価値は、おそらくこの国の現実の貨幣の少なくとも8倍はあり、他の商品と全く同じように、それとは分離した、独立の価値なのである。」<sup>26)</sup>

「われわれは、『富、もしくは貨幣の範疇に、諸権利が含まれる』とするローマ法の完全な正当性を認める。」<sup>27)</sup>

「この権利もしくは信用は、貨幣、小麦、綿花、獣皮そのほかいかなる商品とも全く同様に買われ、売られ、交換されるところの財産なのである。」<sup>28)</sup>

「これらの諸権利もしくは信用は、ローマ法では、富の範疇にはっきりと含まれていた。」<sup>29)</sup>

「富の、唯一正しく包括的な定義は、交換されうる権利というものである。これまででもっとも巨大な、この国の財産の種類は信用である。経済学における信用は、力学における重力と正確に対応する。重力は、純粹で簡単な力で

ある。そして信用は、労働や物質性のいかなる概念も取り除かれた、純粹で簡単な交換可能性である。」<sup>30)</sup>

今日の知識資本主義の問題<sup>31)</sup>を考えると、マクラウドの無体財産の議論は、改めて注目に値する。とはいえここで重視すべきは、「土地と労働の年々の生産物」という、アダム・スミスの富概念を否定し、ローマ法を援用しつつ「交換されうる権利」を富とした点であろう。この「交換」の重要性についてマクラウドは、「誰もそれを求めず、誰もそれと交換に何かを提供しようとしなければ、その所有者にとって、それは、彼がサハラ砂漠の中心にいるのと同様に価値をもたない。」<sup>32)</sup>と説明している。どんなに素晴らしい財貨を持っていても、交換が起らないかぎり、サハラ砂漠にいるのと同じくらい不毛だというのである。しかし、不毛なサハラ砂漠の中心にいても、並々ならぬ努力によって確保された水や食料は富である。この場合、富であることの条件は直接的な消費対象として生産されたことであって、交換されうることではない。他方、サハラ砂漠で権利証書が富になりえないのは、交換できないからというよりも、そもそも権利証書が本来の富ではないからである。マクラウドによる、スミスの富概念に対する批判は、このような意味で、十分な説得力をもたないといわざるをえない。この点を踏まえたうえで、次に、一般的な価格の決定要因に関するマクラウドの見解をみよう。

## (2) 価格の決定要因としての「需要と供給」

「あらゆる異なった状況のもとで生産された小麦が、同一の市場で一緒になる。しかし、それぞれに区別された小麦の袋が、アダム・スミスがそう呼ぶ自然価格にしたがって売られるということは決して起こらない。逆に、同じ質の小麦は同じ時、同じ市場では、同じ価格で売られるのである。…市場において価格に影響するのは、需要と供給だけである。」<sup>33)</sup>

「(リカードが行っているように) 無制限な生

産と競争の対象ではない商品種類を一般法則の適用から排除することは、帰納哲学の何たるかを理解するものにとっては一瞬たりとも許すことはできない。」<sup>34)</sup>

「スミスとリカードはともに、生産者を、商品に価値を授与するものと見ているが、価値を与えるのが消費者であることは明白である。」<sup>35)</sup>

「したがって、政治経済学における普遍的な法則は、需要と供給の関係が、唯一の価値の規定者であるということである。」<sup>36)</sup>

「市場価格を規定するのは、常に供給と需要の比率であり、生産費用として提供されうる価格、もしくは、生産がなされる最も不利な環境を示唆する価格は、最も多くの量を規定する価格である。」<sup>37)</sup>

「価値はある対象の質ではなくて、ある心の動きである。価値の唯一の起源、源もしくは原因は人間の欲望である。諸物に対する需要があるとき、それらは価値をもつ。」<sup>38)</sup>

マクラウドがスミスやリカードの生産費説を徹底的に批判し、主観価値説に基づいた需要供給説をとったことは明白である。ただし後述するように、マクラウドは、効用は測定できないという理由から、効用価値説を認めなかった。その意味で、マクラウドの一般的な価格決定論は、古典派の労働価値説もしくは生産費説に対する否定の側面が中心となっていて、それにとってかわる新たな積極説の展開は弱いというべきであろう。しかしながら、マクラウドの古典派価値論批判は、自由貿易の主張と結びつくとき、ユニークな一面をのぞかせる。マクラウドの価値論が注目に値するのは、むしろこの側面である。

## (3) マクラウドの自由貿易論と価値論

「地代もまた、明らかに生産費用の要素である。そこで、アダム・スミスと保護貿易主義者たちはいう。小麦の価格を規制するのは地代の額であると。ところが事実は逆であって、小麦の価格こそが地代を規制するのである。」<sup>39)</sup>

「農民は工場主と同じ立場にある。彼らは、すべての技術とエネルギーを、生産費用を削減することに捧げなくてはならない。…彼らの誰も、すべての科学上の進歩が採用され、すべての方策が使い果たされるまでは、生産費用を絶対的なものとして固定しえない。生産費用と生産物の価値が、互いに関係しあうことは明らかに正しいが、生産費用が生産物の価値を支配するのか、逆に生産物の価値が生産費用を支配するのか、が問題なのである。この相違は、保護貿易と自由貿易の相違に相当する。前者の体制では、生産費用は、考えられるかぎり浪費的で不経済であろう。」<sup>40)</sup>

「地主は、資本が土地からなっているところの資本家である。そして、他のすべての資本家たちと同様に、彼はその資本でみずから商売をするか、一部を他人に貸して商売をさせる。もちろん、彼は、他のどんな資本家もそうであるように、彼の資本の使用に対して、利子を受け取る権利を持つ。」<sup>41)</sup>

「もし鉱山の地代が、鉱山の豊度の差のみから生じ、その差の結果において支払われるだけであるならば、そのことが次のような事態を導くことは明白である。すなわちもし、そこにおけるすべての鉱山が同一の豊度を有するならば、地代のようなものは存在しえないだろうということである。この教義は、あまりに馬鹿ばかりすぎて、わずかな反論も必要ない。」<sup>42)</sup>

みられるように、マクラウドは、あろうことか、アダム・スミスを保護貿易主義者の仲間に入れて批判している。その理由は、スミスの生産費説にある、と彼はいう。スミスは生産費の要素である地代が価格を規定するとみなし、その逆に価格が地代を規定するとは考えなかったがゆえに、技術とエネルギーを生産費用の削減に振り向けるといふ、経済的で効率的なあり方から目をそむけ、保護貿易主義者の、浪費的で不経済な政策を、支持する結果になっているというのである。

マクラウドはこの論理によって、古典派の価

値論、地代論を批判することと、保護貿易主義を批判することとを両立させているのである。前者の、古典派批判の部分からは、重商主義的な側面、すなわち前貸しと還流  $G-W-G'$  の結果として、貨幣  $\Delta G$  を取得する権利は、資本にも土地にもあてはまるとして「絶対地代」に類似した論理を主張するという側面を生じさせている。他方後者の、保護貿易主義批判の側面からは、自由貿易を、生産費用を削減し、経営を合理化する好機ととらえる「マンチェスター派」的な志向を生じさせているのである。マクラウドの価値論についてのマルクスの謎めいた指摘、すなわち「自由貿易主義と保護貿易主義の見事な総合」との指摘の内容は、上に述べたような事実の反映としてならば、理解できなくはない。いずれにせよ今後のさらなる検討が望まれるところである。

さて、マルクスのマクラウド評価は、価値論については、説明不足のうらみがあるものの、ほぼ正当な評価といってよい。しかし、マクラウドの資本理論については、マルクスの評価は正当とはいえない。次にその点を確認してみよう。

#### Ⅳ マクラウドの資本理論

マクラウドは、マルクス経済学的にいえば、単純な商品流通（もしくは貨幣としての貨幣の流通）と資本の流通（もしくは資本としての貨幣の流通）とを明確に区別している。まずこの点をみよう。

##### (1) マクラウドによる単純な商品流通と資本の流通との区別

「箱の中に鍵を掛けて入れられている貨幣は、ひとりで増殖することはできない。それは潜在的な力を示しているだけで、現実的な力を示さない。それは潜在的な状態にある力ないし富と呼ぶことができ、営業していない工場の蒸気機関に似ていて、動かされないかぎり役に立たないのである。そして、ちょうど工場の生産物

が、エンジンの運動量によって測られるのと同じように、通貨の有用効果は、われわれが『流通 (circulation)』と呼んだところの、その運動量によって測られるのである。』<sup>43)</sup>

「人は第一に、貨幣を、自分自身のための商品の購入に費やすだろう。それらは、彼に楽しみを与えるが、それだけであって利益は生まない。…第二に、彼は貨幣を、時とともに富の増大を彼にもたらしだそうとの意図をもって、再生産的な目的に使うだろう。

通貨がこの方法で用いられるとき、すなわち通貨が、それ自身が他の商品の生産に役立つような商品の生産に使われるとき、それは通常、資本と呼ばれ、同時に資本という言葉の使い方もまた、他商品の生産において、作用因として機能するよう生産された商品それ自身にも適用されるように、拡張されるのである。』<sup>44)</sup>

「どんな経済量も、二つの方法で用いられる。その持ち主は、自分自身の享楽のためにそれを用いるか、もしくは、利潤を生むために、それを用いることができる。』<sup>45)</sup>

マクラウドの「箱に入れられている貨幣は増殖せず、現実的な力を持たない」との文章は、マルクスによる、蓄蔵貨幣と資本の区別<sup>46)</sup>を彷彿とさせる。また個人の享楽に用いる貨幣と、富を増大し、利潤を生むために用いる貨幣との区別は、マルクスによる、使用価値を目的とした流通（貨幣としての貨幣の流通）と、価値を目的とした流通（資本としての貨幣の流通）の区別にほぼそのまま該当するといつてよい。さらに、マクラウドが「貨幣から商品への資本概念の拡張」を述べていることは、マクラウドが貨幣のみを資本とみなしたわけではないことを示していよう。では、マクラウド自身の、積極的な資本の定義とはどのようなものであったのだろうか。次にその点のみよう。

## (2) マクラウドによる資本の定義

「労働者が、その収入をすべて商品に使わずに、一部を蓄えらるゝとしよう。そうすれば、そ

の年の終わりには、彼が蓄えた分だけ、彼の条件はよくなっているであろう。その貯蓄は、彼が行ったサービスのうち、まだ等価を受け取っていない部分を表している。この貯蓄は資本と呼ばれる。1ペニーであろうと、1シリングであろうと、1ポンドであろうと、それは資本の最初の芽生えである。労働者が使わずに貯めれば貯めるほど、彼の資本は大きくなる。彼が使う貨幣の部分を収入と称し、彼が貯める部分を資本と称する。したがって、基本的な資本の観念は、その所有者が、まだ商品の購入に使っていないところの、蓄積された労働の貯蔵である。』<sup>47)</sup>

『『資本』という言葉によって、われわれは商業の動力を意味する。つまり、エンジンにとって、まさに燃料にあたるものが、商業にとっては資本なのである。』<sup>48)</sup>

「彼（商人）は事業を始めるにあたって、売ろうと意図している財を購入しなくてはならないが、彼がそれを購入することを可能にする力は何だろうか。資本である。したがって、資本は購買力であり、商業の動力であり、財を生産者から商人へ動かす力である。』<sup>49)</sup>

「資本は、そのもっとも拡張された一般的な意味では、人がそれで商売をし、それを利益の獲得という目的に向けることができ、彼が収入を得る手助けとなる何物か、である。』<sup>50)</sup>

みられるように、マクラウドの資本の定義は3種類存在している。第一の定義は、労働者の行う貯蓄、すなわち「蓄積された労働の貯蔵」である。この考え方は、一見前項の(1)でみた、「箱にしまわれた貨幣」に対する評価、すなわち貯蓄するだけでは意味がない、とする評価と矛盾するようにみえる。しかし、ここでの貯蓄は、資本そのものというよりも「資本の芽生え (germ)」もしくは「資本の観念 (idea)」とされていることに注意すべきだろう。むしろ、ここではマクラウドが、労働者が資本家へと階級移行する可能性を示唆している点が注目し値する。マクラウドはこの問題に関連して次のよう

に述べている。

「信用のシステムによって、わずかな資力の人々でも事業を始めることができるし、誠実さとつまじさを徹底すれば、彼ら自身の資本を堅実に蓄積することができるだろう。」<sup>51)</sup>

「信用の発明は、最も卑しい人々が、裕福への階段の最初のステップに足をかける手段を提供した。」<sup>52)</sup>

つまりマクラウドによれば、労働者がもっているささやかな資本の萌芽は、信用のシステムを利用することによって、着実に成長することができるし、労働者が資本家へと階級移行する可能性も与えられているというのである。この点は、マルクスとマクラウドの階級観の違いとして、重視すべきだろう。

第二の資本の定義は、商人が事業を起こすさいの「購買力」である。シュンペーターは、マクラウドのこの定義をもっとも評価した。

「彼(マクラウド)の他の資本概念——すなわち蓄積された労働としての資本——に対しては、われわれはなんの関係もない。しかし、彼が購買力創造の事実こそわれわれの経済生活の組織の本質的要素であると認識したことは、…マクラウドの功績としてつねに認められなければならないであろう。」<sup>53)</sup>

多くの場合、「購買力」として現れるのが貨幣であることは事実だとしても、マクラウドやシュンペーターが、資本を貨幣そのものではなく、貨幣の属性としての「購買力」ととらえた点は正しく評価されなければならない。

第三の資本の定義は、「利益の獲得に向けることのできる何か」である。この定義は、第一、第二の定義とくらべて、資本の目的が価値増殖であることを示唆している点ですぐれている。また、利益に向けられる何かは、貨幣だけではなく、商品、生産手段、労働力でもありうることに注意すべきである。

以上、マクラウドによる3種類の資本の定義をみたが、概観するかぎり、それらには、統一性がなく、なお現象論的段階にとどまっている

と言わざるをえない。とはいえ、いずれの定義においても、「資本は通貨である」と主張したものはない。その点で、マルクスのマクラウド評価は一面的であったというべきである。

### (3) マクラウドによる固定資本と流動資本の 区別

これに関しては、マクラウドは次のように述べている。

「収益(return)は、2つの異なった方法によって生じる。それは一回の操作で生じるか、もしくは一連の継続する操作によって生じるか、のいずれかであろう。もし収益が1回の操作で形成されるならば、それは流動資本 Floating Capital と名付けられる。他方、もし収益が一連の操作の継続によって生じるならば、それは固定資本 Fixed Capital といわれる。」<sup>54)</sup>

マルクスが価値の流通の態様の違いによって固定資本と流動資本を区別したのに対し、マクラウドは、収益の発生方法の違いによって両者を区別しているという違いはあるが、その点に目をつぶれば両者による固定—流動の区別は驚くほど近似しているといつてよい。マクラウドは、この点では、明らかにミスヤリカードよりも、マルクスに近いのである。まして、マクラウドのこの区別を「要求払預金と通知払預金の区別」に転化したものとは、到底みなしえない。この点では、マルクスは明らかな事実誤認を犯しているというべきだろう。

以上、マクラウドの資本理論を概観したが、不統一な面を残しつつも、それが古典派の資本理論よりはるかに洗練されており、むしろマルクスに近いことが明らかとなった。このように、マクラウドが、価値論においては、マルクスとは逆に、労働価値説の否定に向かいながら、資本理論においては、結果的にマルクスに接近していったのは何故だろうか。その問題を考える前提として、次に、マクラウドの経済学方法論をみてみよう。



## V マクラウドの経済学方法論

### (1) 帰納的科学としての政治経済学

「主要な問題はしたがって、政治経済学を、帰納哲学のもっとも厳格な原理に基づいて取り扱うこと、あるいは、事実上、政治経済学の議論に、帰納哲学を適用することである。

しかし、これまでどの著述家も、そのような作業を試みようとしなかった。このため、それを成功裏に行うために、また、帰納哲学の真髓を主題にいかん適用すべきかをみるためにも、帰納哲学の精神と真髓を理解しているだけでなく、ビジネスの詳細についての、精密な実際の知識を有していることが必要である。

政治経済学の諸分野のなかでも、この著作の主題である「貨幣論 Monetary Science」は重要性において抜きん出ている。それどころか、政治経済学のほとんどすべての分野は、その派生物だといっても言い過ぎではないであろう。<sup>55)</sup>

「いまや、「貨幣論」は、力学とのもっとも近接した、もっとも驚くべき類似性を帯びる。

われわれが、ビリヤードのボールが、ほかのボールに当たって動いたというとき、その言い方は、部分的に不正確で、部分的に遠まわしである。事実を正しく表現すれば、次のようになるだろう。動いているビリヤードボールがほかのボールの一定距離内に接近したとき、自然原理の動きが喚起され、ほかのボールを特定の方向へ、ある速度で動くようにさせる、と、さて、われわれが、商品の希少性は、価格の上昇をもたらすというとき、その表現はまったく同じ意味で遠まわしなのである。なぜなら、価格を上昇させたのは、現実の希少性ではなく、ある介入的な (intervenient) 人間性の原理に基づいて動く希少性が、価格の変化を起こしたのだからである。<sup>56)</sup>

「これらの介入的な諸原理は、次のように列挙できる。

1. 貨幣愛は普遍的である。
2. 商人は一般的に、その商品に対してできる

だけ高い価格を要求する。

3. 求められる商品の希少性は、商人に、通常売るべき価格よりも高い価格を要求することを可能にする。
4. 商人は、このより大きい希少性を発見することができる。
5. 商人は、通常より高い価格を強要するために彼らに与えられた力を使うだろう。<sup>57)</sup>

マクラウドが、経済学に帰納哲学を適用するにあたり、「ビジネスについての、精密な実際の知識」を求めているのは正当である。しかし、帰納的科学としての経済学の構築をあせるあまり、力学とのアナロジーを強引に求めた点はいただけでない。次に示すように、それは古典派以上に超歴史的な経済像を導いてしまったのである。

### (2) マクラウドの超歴史的「経済」

「人類は、文明のもっとも高い段階から、もっとも低い野蛮な形態に至るまで、利得に対する欲望によって、普遍的に突き動かされている。それは、記録の残るもっとも遠い過去の世代において、今と同様であったし、人間の本性が現在のままであり続ける限り、将来もまたそうであろう。三千年前、貨幣のことを何も知らなかった人々の間でも、悪意をもって、不等価なプレゼントを友と交換する男は愚か者と思われたし、人間の感情は今日といささかも異ならないのである。<sup>58)</sup>

「これらの法則は、したがって、寸分も違わない正確さで作用している。それらは普遍的に真実である。人間の本能 (instinct) は、運動の法則のように、確実に、一定であり、普遍的である。そして、この事情こそが、「貨幣論」を、精密科学、もしくは帰納的科学の地位へ押し上げるのである。このことこそが、「貨幣論」をして、力学と同じように確かで、しっかりした、不滅の基礎の上に確立することを可能にするのである。すべての政治的科学のうちでひとり「貨幣論」のみが、他の自然法則のような、

寸分たがわぬ確実性をもって、その現象を表現できるのである。」<sup>59)</sup>

みられるようにマクラウドは、経済学が精密科学になりうる根拠を、経済現象の基礎にある人間本性（もしくは本能）の「超歴史性」に求めている。この「超歴史的」原理の重要性をマクラウドは強調し続けたとあってよい。しかし、その「超歴史的」原理は、「歴史的」実在のなかに隠れているのであって、だからこそ、原理を抽出するためには、「ビジネスの詳細についての精密な实际的知識」が必要なのである。そうだとすれば、歴史的実在のなかから、「超歴史的」原理にあたるものと、そうでないものを振り分ける必要がある。その点を明確にした点に、マクラウドの方法論の独創性がある。次にそれをみよう。

### (3) マクラウドによる「原理」と「制度」の区別

「政治経済学、とりわけそのもっとも重要な分野である「貨幣論」を、政治的制度から本質的に区別するのは、その代理人によって諸現象や諸結果が生み出されるところの、この原理の普遍性である。前者は、昨日も今日も、そして永遠に同一である。地球上の、最初の2人の住人が取引を始めるやいなや、政治経済が発生する。そのことはずっと考えられてこなかった。何千年ものあいだ、それは消し去られてきたし、いまなお、発見されていない。しかし、彫刻家の手によって未だ呼び起されずにいる、塊の中の彫像のように、それは存在したのである。その法則は、未だに人類の知性によって認められていないとはいえ、絶対確実な正確さで作用するのである。」<sup>60)</sup>

「しかし、政治的制度は、たえず変化しており、一時的でかつ局所的である。それらは、特定の人々、特定の時代にのみ適用される。それらの効果は、諸国民の、制御しえない気まぐれや、偏見や、感情や、気質に多く依存する。同じ法則が、異なる程度の知性や判断力を有す

る人々の間では、まったく逆方向の作用を及ぼすことがありうる。それゆえに、政治における一般法則は、極度に不確実で、不満足なものである。それらは概して、個々の事例が、一般的な結果に溶け込むような、大きな集団に対してのみ適用できる。しかし、利己心の本能、個人的利益の本能は普遍的であり、少なくとも例外は、無視しうるほどにわずかなのである。」<sup>61)</sup>

みられるように、マクラウドが主張する方法論の特徴は、超歴史的「原理」と特殊歴史的「制度」とを峻別するところにあったとあってよい。にもかかわらず、マクラウドの経済学の内容をみると、「原理」と「制度」を峻別したところでは、ユニークな成果は出されておらず、逆に「原理」と「制度」が切り離しがたく結びついた領域、すなわち「ローマ法における『富』概念」や、「生産費説と自由貿易政策」、「為替手形とピール条例」<sup>62)</sup>といったテーマにおいてこそ本領が発揮されているのである。ここにマクラウドの深い矛盾がある。

逆説的だが、マクラウドが、自らの方法論に忠実に、普遍的、一般的な原理を導こうとした価値論の領域では、内容に乏しい「需給説」以上のものは生み出されなかった。他方、一般的原理を追求しつつも、背景にある具体的問題にとらわれたがゆえにまとめきれなかった資本理論のほうは、不統一という欠点があるにもかかわらず、内容のある結果が生み出されたのである。マクラウドが古典派批判の先駆者として、ポリテイカル・エコノミーからエコノミックスへの移行を先導したにもかかわらず、理論家としては、低い評価に甘んじざるをえなかったのも、そうしたことが原因だったと思われる。最後にその点を確認して本稿を締めくくることとしよう。

## VI エコノミックスの誕生とマクラウド

マクラウドは、生産や分配ではなく「交換」こそ、純粋な経済学の第一義的な課題だと考えていた。彼は1858年の著書で次のように述べ

ている。

「私の考えでは、純粋科学としての政治経済学の真の対象は、交換されうる諸量の関係を規定する法則を発見することである。」<sup>63)</sup>

また、マクラウドは、彼のこうした考えがホエートリー（Whately）の考えに近いことと、そのホエートリーが、経済学の新しい名称としてカタラクティクス（Catalactics）を提唱していたことも知っていたが<sup>64)</sup>、この時点では、経済学の名称変更は得策ではないと考えていた。

しかし、1870年代に入ると、積極的にエコノミックスの用語を用いるようになる。1872年に刊行された『経済哲学の原理』の第一章の標題は「経済学にふさわしい探究方法について」となっているが、このなかの「経済学」の原語はECONOMICSである<sup>65)</sup>。当時ジェヴォンズでさえ、Political Economyを使っていたことを考えると、マクラウドの先駆性は明らかである。この点について、ジェヴォンズ自身が、1879年の『経済学の理論』第2版への序文で、次のように語っている。

#### (1) ジェヴォンズによるマクラウドの評価

「(1871年に刊行された初版からの) 些細な変更としては、例えば、私はPolitical Economyという名称をEconomicsという単一で便宜な名辞をもって置き換えた。私はわれわれの科学を示す古い厄介な複合名辞は、できるだけ速やかに解体されてしかるべきものと考えざるをえない。若干の著者はPlutology, Chrematistics, Catalacticsのような全く新たな名称を導入しようと試みた。しかし何故Economicsにまさる何物かを必要とするのか。この名辞は、従来の名辞により類似しかつ密接に関連しているほかに、形式上Mathematics, Ethics, Aesthetics および幾多の知識部門の名称と完全に類似し、そのうえ、アリストウトル時代以来の伝統をもつのである。私の知る限りでは、マクラウド氏が近年におけるこの名

称の再導入者であるが、ケンブリッジのアルフレッド・マーシャル氏もまたこれを採用した形跡がある。」<sup>66)</sup> (傍点一筆者)

「ここで注意したいのは、ヘンリー・ダンニング・マクラウド氏の著作がことごとく、数学的取扱いへの強烈的傾向を示しているということである。…私は幾多重要点においてたしかに彼と見解を異にするが、しかし私が彼の著作の若干を利用したために得た援助に対しては感謝の意を表さねばならない。」<sup>67)</sup>

みられるように、ジェヴォンズのマクラウドに対する評価は、全く肯定的なものである。しかし、逆にマクラウドのジェヴォンズに対する評価は、肯定と否定相半ばするものであった。このことは、ポリティカル・エコノミーからエコノミックスへの転換を先導しながら、次の時代の主流派となった新古典派に与することを拒んだマクラウドの姿勢を反映しているといえよう。

#### (2) マクラウドによるジェヴォンズの評価

「私はまず、ジェヴォンズが、この科学のためにエコノミックスという名称を採用したことを述べておきたい。この名称は、私が、ポリティカル・エコノミーという不体裁な名称の代わりに提唱したものであった。

ジェヴォンズは、経済学が本質的に数学的科学であるとの説を、精力的かつ熱狂的に主張している。…

そして彼はこの主張を、きわめて詳細に、実にみごとな、否定しがたい論証をもって行っている。それらの論証について、私は完全に同意するものである。

その序言において彼は次のようにいっている。『私がこれまで以上に明確に到達しつつある結論は、経済学の真の体系を獲得するという希望をかなえる唯一の道は、リカード学派の混乱した、非常識な仮定を永久に捨て去ることだということである。』『経済学の真の体系がようやくにして確立されたあかつきには、デヴィッ

ド・リカードという有能だが頑迷な男が、経済科学の車をそらせて誤った道に載せ、同じく有能だが頑迷な崇拜者ジョン・スチュアート・ミルによってさらに混乱した方向へと押しやられたことがわかるだろう。…粉々になった破片を集めてはじめてやり直すことは骨の折れる作業であろうが、経済科学の進歩を望むものは、その作業を避けてはならないのである。』

これらの意見に私はここから同意する。実にそれこそがまさしく、40年以上にわたって私が倦むことなく従事してきた作業に他ならないのである。…

ジェヴォンズが、私の体系を受け入れることを躊躇するのは、彼に法律と実際のビジネスに関する知識が不足しているためである。…彼は、今日の経済学の文献が、少数の例外を除いて、現在数十億という多量に達している、法律上無体財産 (Incorporeal Wealth) と名付けられた膨大な財産のことを完全に無視しているということに気付いていない。』<sup>68)</sup>

「あらゆる堅実な経済学者は、効用が価値の基礎たりえないことを認めてきた。…価値と交換のすべての現象は相互需要 (Reciprocal Demand) から生じる。』<sup>69)</sup>

「私は彼 (ジェヴォンズ) に次のように言ったことがある。もしそのような方法が採用されるとしたならば、船頭は、船のコースを変えようと舵を切るたびに、求められる効果が生じるにはどのくらい舵の向きを変えたらよいか、微分方程式を解いて答えを出さねばならない。またイングランド銀行の総裁は、割引率を上げたり下げたりするたびに微分方程式を解かねばならない。と。』<sup>70)</sup>

「経済学は第一に法的科学である。なぜならそれは、あらゆる種類の財産を扱うからである。それは経済量が何であるかを決定するために、法律の最も繊細な分野の知識を必要とする。第二にそれは、経済量がお互いにどのように交換されるかを知るために、商業機構の完全な知識を必要とする。最後に第三に、経済量を支配す

る法則を、他の物理科学の法則と調和させるやり方を知るために、数学と物理学の十分な知識を必要とする。』<sup>71)</sup>

注意すべきは、マクラウドが数学の利用そのものに反対しているわけではないということである。むしろ、ニュートン力学を諸科学の模範と考えたマクラウドにとって、数理科学としての経済学の発展は大いに望ましいことであった。にもかかわらず、マクラウドにとっては、限界効用価値説における微分の使用は行き過ぎであり、効用価値説そのものもまた受け入れがたかったのである。そうした微積分学の誤った使用のかわりにマクラウドが経済学者に求めたのは、法律の知識であり、ビジネスの知識であった。現代の経済学者、とりわけ新古典派の経済学者は、これにどう答えるであろうか。

#### おわりに

マクラウドの方法論は、原理と制度を切り離す仕方に無理があった。しかし、原理と制度の接点における論理展開においては、今日でもみるべき合理的内容が含まれているといつてよい。このことは彼の業績の中心をなす信用論においても当てはまるはずである。しかし、その本格的な検討は別稿に委ねたい。

#### 注

- 1) 戦後日本の文献では、麓健一「信用創造論」、信用理論研究会『講座 信用理論体系』、日本評論新社、1956年6月、第3部学説篇、第3章で、マクラウドが詳しく扱われている。
- 2) 小西一雄「マルクス信用論のひとつの読み方」、『経済』新日本出版社、2004年1月は、「内生的貨幣供給論」を最終的に否定する立場から、マクラウドに言及している。他方、吉田暁「内生的貨幣供給論と信用創造」、『季刊 経済理論』第45巻第2号、2008年7月は、「内生的貨幣供給論」を肯定する立場から、マクラウドに言及している。
- 3) この点について、シュンペーターは次のように述べている。「彼の功績を単に銀行制度に関する彼の著作に限るのは、極めて不当であつ

- た。彼は非常に独創的な思想家であった。たとえば彼は周知のように、心理学的価値理論の最も明快な先駆者の一人であった。また彼はワルラスに先んじて純粋経済学の厳密な性質を認識した。」(シュンペーター『経済発展の理論』上、塩野谷祐一、中山伊知郎、東畑精一訳、岩波書店、1977年9月、331ページ)
- 4) マクラウドの経歴については、*The New Palgrave: A Dictionary of Economics* London and New York: Macmillan and Stockton. 1987, ed. by John Eatwell, Murray Milgate, and Peter Newman の“Macleod”(Murray MilgateとAlistair Levyが執筆)によった。
- 5) Hayek, F. A., 1933, Henry Dunning Macleod. In *Encyclopedia of the Social Sciences*, ed. E. R. A. Seligman. New York: Macmillan, Vol. 10
- 6) Macleod, H. D., 1855, *The Theory and Practice of Banking* London: Longman, Brown, Green, and Longmans.
- 7) Hayek, 1933
- 8) Macleod, H. D., 1896, *History of Economics*. London: Bliss, Sands & Co., p. 142
- 9) Macleod, H. D., 1858, *The Elements of Political Economy*, London: Longman, Brown, Green, Longmans, and Roberts.
- 10) 「リカルドの価値論にたいして、いささか類似した批判を加えた学者はほかにもたくさんいる。そのなかでもマクレオドの名は特記に値しよう。かれが1870年以前に著した著作は、後年ワルラス教授やカール・メンガー教授またボエム・バヴェルク教授やウィーザー教授が費用に力点を置いた古典的な価値論に加えた批判に比べると、その内容の点でも形式の点でもすでにこれらの先駆となっていたところが多い。」マーシャル『経済学原理』馬場啓之助訳、東洋経済、1966年9月、299-300ページ、Alfred Marshall, 1820, *Principles of Economics*. 8th edition, London: Macmillan, p. 821
- 11) Hayek, 1933
- 12) シュンペーター前掲書、331ページ
- 13) 同上。ちなみに、*Palgrave's Dictionary* によれば、マクラウドは、1863年にケンブリッジ大学、1871年にエディンバラ大学、1888年にオックスフォード大学に応募し、いずれも失敗している。
- 14) Macleod, H. D., 1872, *The Principles of Economical Philosophy*. London: Longmans, Green, Reader, and Dyer.
- 15) Macleod, H. D., 1889, *The Theory of Credit*, London: Longmans, Green, and Co.
- 16) *op. cit.* 本書は、後述するように、ジェヴォンズに対するマクラウドの評価がうかがえて興味深い。
- 17) カール・マルクス『経済学批判』杉本俊朗訳、大月書店、1953年8月、73ページ、Karl Marx *Zur Kritik der Politischen Oekonomie* Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 13, Dietz Verlag, Berlin, 1961, S.47
- 18) 同上、187-8ページ、*Ibid.* S. 120
- 19) カール・マルクス『資本論』第一巻第一分冊、資本論翻訳員会訳、新日本出版社、1982年11月、104ページ、Karl Marx *Das Kapital*, Erster Band, Dietz Verlag Berlin 1975, S. 75
- 20) 同上、第二分冊、263ページ、*Ibid.* S. 169
- 21) 同上、第六分冊、359ページ、*Ibid.* Zweiter Band, S. 230
- 22) 後述するように、重商主義の特徴をG-W-G'による△Gの取得の強調に求め、自由貿易主義の特徴を競争圧力による生産費用の削減に求めるならば、という意味である。
- 23) マクラウドは需給説の立場からではあるが、商品と貨幣に共通する属性を、資本の本質と考える側面をもっていたように思われる。
- 24) とはいえ、マクラウドにはマルクスのような、価値移転と価値付加の区別はない。このため、固定資本と流動資本の区別も、価値移転もしくは価値の流通の仕方の違いからではなく、収入の発生方法の違いからなされている点は注意されねばならない。
- 25) 「社会の真の富即ちその土地と労働の年々の生産物」(アダム・スミス『国富論』上、竹内謙二訳、千倉書房、1981年3月、6ページ)
- 26) Macleod, 1858, pp. 11-12
- 27) Macleod, 1872, p. 284
- 28) *Ibid.* p. 474
- 29) *Ibid.* p. 475
- 30) *Ibid.* p. 478
- 31) この問題については、小沢弘明「知識資本主義と新自由主義大学」『科学』七十七巻五号、2007年5月、が興味深い。
- 32) Macleod, 1872, p. 285
- 33) Macleod, 1855, p. 96
- 34) Macleod, 1858, p. 107
- 35) Macleod, 1858, p. 111
- 36) *Ibid.*
- 37) *Ibid.* p. 115
- 38) Macleod, 1872, p. 323
- Macleod (39) Macleod, 1855, p. 98
- 40) *Ibid.* pp. 101-102
- 41) Macleod, 1872, vol. II, p. 20
- 42) *Ibid.* p. 25
- 43) Macleod, 1855, p. 51
- 44) *Ibid.* p. 55
- 45) Macleod, 1872, p. 220
- 46) 「貨幣蓄蔵者は狂気の沙汰の資本家ではないのに、資本家は合理的な貨幣蓄蔵者であ

- る。」マルクス, 前掲書, 第二分冊, 261 ページ,  
*Ibid.* S. 168
- 47) Macleod, 1858, p. 66  
 48) Macleod, 1855, p. 260  
 49) Macleod, 1858, p. 69  
 50) *Ibid.* p. 70  
 51) *Ibid.* p. 265  
 52) *Ibid.* p. 276  
 53) シュンペーター, 前掲書, 330 ページ  
 54) Macleod, 1855, p. 56  
 55) Macleod, *The Theory and Practice of Banking*  
 vol. II, 1856, "Introduction" pp. 29-30  
 56) *Ibid.* p. 33  
 57) *Ibid.* p. 34  
 58) *Ibid.* p. 35  
 59) *Ibid.*  
 60) *Ibid.* pp. 35-36  
 61) *Ibid.* p. 36  
 62) *Ibid.* pp. 36-37 マクラウドは, 為替手形を通  
 貨から除外するのは誤りだとの立場から, 通貨  
 学派とピール条例を批判している。
- 63) Macleod, 1858, "Preface", p. 6  
 64) *Ibid.*  
 65) Macleod, 1872, "Chapter I On the Method  
 of Investigation Proper to Economics"  
 66) ジェヴォンズ『経済学の理論』小泉信三ほか  
 訳, 日本経済評論社, 1981年, 8月, 「第2版  
 への序文」17-18 ページ  
 67) 同上, 26-27 ページ  
 68) Macleod, 1896, pp. 156-7  
 69) *Ibid.* p. 158  
 70) *Ibid.* p. 159  
 71) *Ibid.* p. 161
- [どい ひでお 横浜国立大学大学院国際社会科学  
 研究科教授]